

加治川運河水門、 土砂吐水門

新潟県新発田市真野原

石造りの堅牢な水門に桜の花びらが柔らかな風に
乗って踊る。左右ほぼ直角に腕を伸ばしたようなくの
字型の水門の名称は加治川運河水門、土砂吐水門。大正
時代に治水対策の一環として整備された。

山形と新潟の県境、^{いいて}飯豊連峰を水源とし、大きく北
西へ湾曲しながら新発田市を経て日本海に注ぐ加治
川。江戸時代以前の加治川はその流れが砂丘地帯に行
く手を阻まれ、大きく西に流路を変えた後、阿賀野川、
信濃川に合流して日本海に達していた。かつてこの川
は「暴れ川」として知られ、下流域は幾度となく水害に
苛まれてきた。

江戸中期に始まった流域の干拓事業に伴い農業用水
を確保するための河川改修が繰り返され、その影響も
あり下流域では相変わらず水害が発生していた。明治
時代に入ると加治川の排水機能は更に悪化。そこで流
路をショートカットして日本海に導く分水路計画が浮
上する。この加治川分水路工事は1908年に着工、1914
年に完成した。この間20万人もの労力を投入して砂丘
地帯を約5kmにわたって開削する一大プロジェクト
だった。その分派地点に置かれたのがこの水門だ。本川
側に運河水門、分水路側に土砂吐水門を設け、出水時
に運河水門を閉じ、土砂吐水門を開放して流路を日本
海に向かわせる。この水門の稼働後、水害は減少した。

その後、上流に加治川治水ダムが築造されたことから
分水路が加治川本川に指定され、水門もその役割を終
える。現在、この土木構造物一帯は桜の名所となり、暴
れ川から流域を救った証人として川の歴史を伝えている。



分水路の堤防にはその完成と大正天皇の即位を記念して約6,000本の桜が植樹され「長堤十里、日本一の加治川の桜」と謳われた。しかし1966年に発生した水害（下越水害）の河川改修に伴い伐採されてしまう。その後、桜並木復活の声が高まり一帯は加治川治水記念公園として整備が進み、約2,000本の桜とともに水門も復元された。水門は選奨土木遺産、近代土木遺産に選定されている。

